

日韓社会言語学研究の動向と展望

井上史雄*

|| 目次 ||

1. 日韓学術交流と社会言語学の動向
2. 社会言語学の研究動向
3. 第1分野 社会と言語の関係
4. 第2分野 言語の変異
5. 第3分野 談話の規則
6. 第4分野 談話と変異の管理
7. 日韓対照研究の将来

1. 日韓学術交流と社会言語学の動向

本稿では、日韓の社会言語学における学問的交流について考える。日韓は、言語類型が似ていて、対照研究が楽にできる。歴史的にも平行的変化が、文法や敬語で報告されている。文化的背景、レアリアにも共通性がある。社会言語学的対照研究の実り多い領域である。日本と韓国の研究の流れは平行的な発展を見せ、欧米の研究の隆盛とも一致した傾向を見せる。言語学の関連分野の盛衰はGoogle Ngram viewerでたどれる。Sociolinguisticsは、1970年代から隆盛が続いている。対照研究の台頭もある。日韓の社会言語学もこの波に乗り、発展を続け、相互に影響を及ぼしている。

韓国(朝鮮)語に関する手元の文献を抜き出して発行年順に並べたら一定

* 東京外国語大学名誉教授, 社会言語学, innowayf@nifty.com

の傾向が見えた。戦前から戦後しばらくは、言語の記述が主で、系統論(同源説)もあり、方言記述もある。その後初心者向けの、ことばの紹介があり、言語体系と文化の関連を見る研究も混じる。1980年代から、本格的な社会言語学的研究として、移住先での多言語の使い分け、方言差、敬語の用法、スラングなど多様なテーマが扱われた。21世紀には、談話分析と言語景観についての研究が加わった。以下で述べる社会言語学の4分野の発展の順番に一致する。日本語を学んだ韓国人が活躍し、韓国語を学んだ日本人も活躍している。

2. 社会言語学の研究動向

この節では、社会言語学的研究テーマを、社会言語学の4分野の中に位置づけ、日韓の対照研究を位置づける。術語には相互の共通理解のために英語を付けた。

2.1. 社会言語学の2傾向

社会言語学の研究には、変異と談話の2傾向がある。ともに、構造言語学や生成文法での単一言語構造の記述、人や社会を捨象した研究への反動として1960年代以降発展した。変異は、言語・方言・集団語・敬語などの、様々な言語変種がテーマである。1時点でparadigmatic(範列的・系列的・選択的)に使い分け・選択の可能なことばを整理する。談話は、時間軸に沿ってsyntagmatic(連辞的・統合的)にことばをどう並べるかが課題である。

2.2. 社会言語学の4分野

表1に4分野を示す(井上史雄 2011、2008)。社会言語学を2傾向に分けたときの変異を第2分野に、談話を第3分野に位置づけ、第1分野と第4分野を付け加えた。Neustupny(1978)を発展させ、整理したもので、この4分野を使うと、社会言語学の概説書の章分けを、どこかに位置づけできる。

〈表1〉 社会言語学の4分野

社会言語学の4分野	Simplex 単一(純)志向 単一構造に着目	Complex 複数(雑)志向 複数変種併存に着目
言語構造の記述 Competence (言語そのもの) langue	第1分野 言語構造の記述 (社会・文化と言語の関係) (言語相対性理論)	第2分野 言語変異の記述(言語・ 方言・集団語・文体差の記述) (変異理論) (Paradigmatic)
言語運用の記述 Performance (言語の使い方) parole	第3分野 言語(体系)の運用 (談話規則)(談話理論) (Syntagmatic)	第4分野 言語変異の運用(談話に おける使い分け) (言語管理理論) langage

横に並んでいる第1分野と第2分野は、言語構造の記述で、従来の構造言語学で盛んだった。第3分野と第4分野は言語運用の記述で、ことばの並べ方、使い分け、話題や結論をどう並べるかを扱う。縦に分けると、左側がSimplex単一思考で、言語は単純なもので、単一な仕組みを持っているという前提に立つ。右側がComplex複数思考で、ことばは複雑で、我々はことば、方言、敬語を使い分けると考える。

第1分野から第4分野への順番は、ここ100年の学説史的発展とも一致する。日本国内の研究については、真田信治・柴田武(1982)、真田信治(1990a)の展望がある。今後は第4分野が盛んになると期待される。

2.3. 社会言語学の根本原理

社会言語学概説書などには、別方向からのアプローチがある。「言語と民族」「言語と社会階層」「言語と性」のように、言語外の現象を基準に配列する。社会階層の章で言語Aの発音、方言Bの語彙、言語Cの文法などの例が取り上げられ、似た(同じ)現象が性や年齢の章でまた取り上げられる。これに対し、言語の側に基準をとると、繰り返しが少なくなる。本稿でとる4分野の考えでは、言語現象が一定の分野に位置づけられるので、迷いが無い。

第2分野変異については、地表上の広がりに応じて「言語、方言、集団語、敬語、個人語」などの順に記述できる。その説明原理で、似た場面や心理などが繰り返し表れるが、ことばの使い分けの根本原理が共通であることを示すもので、社会言語学の基盤を示す。結論としては、心理的距離や価値が

根本原理と認められる。

この4分野の枠組みは日本語以外にもあてはまる。日本語の諸現象を出発点に、外国語に適用して、妥当性を探る道もある。未開拓の研究領域に気づくこともある。理論や研究技法は研究対象と別レベルであり、日本語の現象は、他の言語でも検証可能である。それぞれの研究分野の考え方を柔軟に受け入れた上で、自分に役立つ情報を得るのが、あるべき姿である。

以下4分野の枠組みをもとに、社会言語学の諸現象を整理する。

3. 第1分野 社会と言語の関係

まず第1分野として、社会と言語の相互関係を扱う。言語構造の記述において社会と言語の関係を見る分野で、19世紀以来古くからある。異なったことばに接したときに、ことばそのものに記録するのが第0段階とすると、その文化的・社会的背景に興味を抱くのが第1段階である。ただ、戦前には他の言語を研究せずに日本語の特質をあげ、美化する論が見られた。

3.1. 言語相対性理論

この第1分野では、言語構造と文化の関係を見る。つまり単一言語体系の共時的記述からわかる文化・社会を扱う。「サピアSapir /ウオーフWhorfの仮説＝言語相対(性理)論」が代表的なアプローチである。「言語相対性理論」では、言語と文化の2項の相互影響を考え、強い・弱い二つの仮説があったが、批判もある。従来の言語相対性理論では、個人の言語と、社会集団の共有財産としての言語を識別せずに、言語と外界の制約・依存関係を論じてきた。しかし、個人の言語習得を中間項に入れ、循環過程としてとらえると、影響関係がきれいに説明できる(井上史雄 2011.12)。方言学における「特有語」(ある方言特有の意味の語、共通語化にない語)とも関連する(井上史雄 2000.2、Inoue Fumio 2013.12)。

3.2. 語彙の対照研究

親族名称・呼称にも、文化的背景がよく表れる。日本語・韓国語それぞれの研究は言語学でも民族学＝文化人類学でも扱っており、日韓対照研究もある。親族名称の詳しさの差を、族譜が伝えられる韓国と数代さかのぼると先祖不明の日本の違いで、説明できる。

社会言語学以前からの日韓対照研究については、国立国語研究所(1997)参照。韓国語・韓国文化の入門書・紹介書に、第1分野の発想が見られる。林八龍(2002)、任榮哲・井出里咲子(2004)は、この分野に位置づけられる。

4. 第2分野 言語の変異

第2分野は、言語の変異variation・変種・多様性の記述で、マクロの社会言語学とも呼ばれる。内容が豊富で、地表上の分布の広さによって、大から小へと並べられる。言語意識、方言意識、言語イデオロギーなどのテーマもこの分野に位置付けられる。日本国内の研究が進むと、韓国の状況も知りたくなり、対照研究で取り上げられた。

4.1. 言語の地位と格差

まず言語間の社会言語学的研究を見よう。地表全体に広がる諸言語間の研究がある。言語の地理学(ブルトン 1988)、生態学として記述される(Calvet 1999)。国内外の日本語・外国語の使用に関しては、言語計画、言語政策で使われる術語、地位statusと実体corpusの区別が便利である。

国境の移動や人の移動などにより、異なった言語が接触する。言語間に格差があり、場面により選択されるという観点は、かつての言語学ではタブーだった。しかし現実の社会を見ると、諸言語は上下に層をなし、英語(帝国主義)が頂点になる。一番下に消滅危機言語endangered languageが下積みになる。そのメカニズムの解明、言語の復活・活性化は現代社会言語学の実践的課題である。言語間のこの格差は、日本と韓国での外国語学習、相互の言語の学習に影響を及ぼす。

4.1.1. 継承語の地位

海外(植民地や移民)の日本語については、1945年の敗戦による引揚があり、後続の移民もなく、コミュニティとしては断絶した。ただしハワイや北米・南米では3世以降でも日本語を保持する場合があります、多様な研究がある。アメリカ在住の韓国人、在日韓国人の調査が任榮哲(1993)により行われ、日本人と対比されて、有益な知見をもたらした。生越直樹(2006)は日韓の研究を報告している。サハリンには残留した韓国人もあり、朝日祥之(2012)により報告されている。

4.1.2. 言語市場と経済言語学

言語接触に関連して、言語間には言語市場language marketが成り立つ。経済言語学的研究は、日本国内でも進んだ(井上史雄 2011.12、韓訳)。言語変種が一地域社会に共存すると、High & Lowの格差が生じる。言語市場では、世界の言語がHとLで位置づけられる。言語景観が研究の手がかりになる(Inoue Fumio 2011.3、井上史雄 2015.5)。言語の市場価値には危険な考え方、差別主義が混じる。市場価値は、言語の知的価値を言うが、その他に言語には情的価値がある(井上史雄 2000.10)。

4.1.3. 言語資源・資産としての帰国子女・在留外国人

国際化につれて、帰国子女が多くなった。また在日外国人の言語問題も、論じられている。国家と言語の関係の理論は、言語政策研究の領域であり、欧米でも盛んである。帰国子女や在日外国人の言語能力は「言語資源」として活用できる。しかしこの視点は、在日韓国人の言語能力に見られるように、日本では評価されていない。言語習得の逆プロセスの言語摩滅language attritionの研究も、在日韓国人について興味深いテーマだが、今後の課題である。

4.1.4. 言語接触と干渉実体

20世紀後半から、日本でも言語体系の接触contactが目立つようになり、研究が進んだ。戦前から日本の旧植民地などで言語接触があり、研究も

あったが、戦後は帝国主義的侵略の象徴としてタブー扱いに近かった。イデオロギーから離れた客観的研究が出たのは最近である。旧植民地などの残存日本語の研究も進み、太平洋や南北アメリカのかつての移民の言語も含め、地理的視野が広がった。台湾原住民の一部に伝えられた日本語クレオールも発見されて(簡月真 2011、Shinji Sanada and Yuehchen Chien 2012)、新知見をもたらした。言語接触では干渉interferenceが起こる。在日2世3世の音声(子音)の干渉が興味深い。

4.1.5. 言語の難易度と教育投資効果

言語学習、外国語の習得は、経済言語学と社会言語学の重要な課題である。日本語は欧米人からは「悪魔の言語」といわれ、アメリカ国務省のデータによっても難易度が高く、韓国語と同等の地位にある(井上史雄 2000. 10、2008.5)。一方日本語・韓国語は言語類型が似ているので、相互の難易度が低く、お互いに学びやすい。これは教育投資効果に関わる。

4.1.6. 言語計画 読み書き能力調査と表記改革

言語政策・言語計画は社会言語学の実践・応用として重要な分野である。日本は戦後モノリンガル国家になり、三位一体説(言語・民族・国家の領域の一致)が実現された。小笠原諸島返還(1968)の際も欧米系の住民の日本語使用が当然とされていた。その後国内の外国人も増え、多言語社会が出現し、多言語対応が問題になりつつある。

戦前から戦後の日本の言語政策はほとんどが表記に関わるものだった。第2次大戦直後の読み書き能力literacy調査は、その後の実証的社会言語学的調査の基盤をなした(柴田武 1978、Sibata Takesi 1998)。漢字削減の議論は昔からあったが、パソコンやスマホで簡単に表記できるようになり、漢字使用への抵抗が薄れた。常用漢字が増え、人名用漢字も増えた。しかし皮肉なことに、街頭の景観文字としては、アルファベットが増え、漢字は減っている(井上史雄 2012.8)。英語やアルファベット表記の増加については、世論調査で批判的意見が出るが、外国語排除の言語政策は見られない。

日本ではデファクトとしてヘボン式が普及し、政府の表記改革はローマ

字には無力だった。韓国ではローマ字のptkとbdgを入れかえた。金浦KimpoはGimpoに、釜山PusanはBusanになって、日本語ローマ字表記と食い違う。しかし人名はKim, Pak, Parkのままです。許されるし、他国の「キムチkimchi」の綴りも変わらない。

4.1.7. 外来語と外行語 実体さ

言語接触の初期段階として、単語レベルの借用語がある。日本語では単語の起源が表記によって書き分けられることが多かったため、漢語・借用語の研究が盛んだった。単語による違いや受け入れ国による違いなどを世界規模で見る研究が進んだ。借用語の研究においては、言い換えalternative(同一意味の代わりのことば)があるかによる2種への分類、分析の手順が必要である。また借用語の情動的・装飾的decorative機能も、社会言語学の視点からは見逃せない。日韓の借用語の比較研究にはヤン(梁敏鎬 2007、2012)がある。

外来語loan wordと逆に海外に進出した日本語は外行語lend wordと呼ばれる。韓国における日本語借用語は、日本からの外行語である。外行語の世界進出がGoogle trendsを用いて扱われた(井上史雄 2012.10、Inoue Fumio 2013.12)。韓国語についても可能である(井上史雄 2012.8)。

ほかに「民族と言語、言語帝国主義、言語忠誠度、三位一体説」のような研究テーマもあり、最近の日本の社会言語学で多くの論考が見られる。

4.1.8. 韓国の研究

以上につき、年代順に主要著書を年代順にあげる。任榮哲1993、真田信治・生越直樹・任榮哲編(2005)、久保田優子(2005)、任榮哲編(2006)、櫻坂おさか英子編(2007)、宮下尚子(2007)、中井精一・ダニエルロング編(2011)、李舜炯編(2019)、高木丈也(2019)。日本国内および世界の社会言語学の趨勢とほぼ対応している。

4.2. 方言間の格差

4.2.1. 標準語と共通語

第2分野の2番目のテーマ方言については、一言語の中の「方言間の格差」があり、価値が変動している。ここでは、「ことば, 方言には価値の差がある」という社会言語学的発想に立って記述する。まず方言と標準語・共通語の対立がある。日本語の術語「標準語」standard languageと「共通語」common languageは戦後以来使い分けられている。しかし普及・変化を扱うときには、共通語化という用語が使われ、鶴岡や北海道で大規模調査があった。

4.2.2. 言語間方言学

日本の方言について、従来は国内だけを見ていたが、外国語との関係から見た日本の諸方言(方言の中の外来語など)という視点もある。言語間方言学interlingual dialectologyである(Weijnen 1978)。前述「外行語」とも関連して研究が進んだ。韓国では醇化(浄化)運動があり、日本語からの借用語は排除されたが、気づかれずに残っており、南部ほどよく使われる。また日本語方言にも韓国語からの借用語があり、西日本に多い(井上史雄 2007.2.)。日本の「尻上がりイントネーション」がソウル方言のものに似るが、偶然か必然か(談話効果のために独立に発達したか)、影響関係は未解明である。

原郷方言の改新があった場合に、移民先に伝播しないことを根拠に、変化年代の推定ができる。広島方言の影響の大きいハワイの日本語で「ら抜きことば」や新方言「ブチ」が使われない。韓国語(済州島方言)にも適用可能である。Trudgill(1999)がcolonial lagと名づけたが、Coseliu(1975)が同様の現象を指摘している。

4.2.3. 標準語・方言のHigh・Lowの関係

日本語方言の社会言語学的な位置付けは、歴史的に3類型の変遷ととらえて、共通語使用能力と関係づける。方言の第1類型は撲滅対象で「方言は悪いことば」というとらえ方で、戦前に多かった。第2類型は客観的・中立的な記述の対象として扱う。これは江戸時代以来現代まで続く。最近目

立つのは第3類型で、娯楽の対象として方言を扱う。今は方言がマスメディアに登場し、文章にも使われる。方言が一種の文体styleとして使い分けの道具になっており、アクセサリーとして、またはコスプレcosplayとして、使われる。方言が公共場面に進出したのは、日韓共通である。この類型変遷には普遍性があり、世界の諸国家の近代化にともない、進行する。つまり方言は第4分野で扱う言語管理language management (LPP, language policy and planning)の対象になっている。

方言の地位変動の適例として、東北地方や沖縄の方言札がある。同様のものは、朝鮮半島(国語札)でも使われた(井上史雄 2008.5)。ブルターニュ半島、ウエールズなど各地でも「言語札」が使われた。

4.2.4. 新方言・ネオ方言

日本語方言の社会言語学的研究として、新方言new dialectがあげられる(井上史雄 2008.5)。新方言は、下からの言語変化language change from belowであり、新方言が共通語の下に、意識されずに入っている。歴史言語学の対象でもある。似た用語ネオ方言neo-dialectは異なった意味で使われる(真田信治 1999)。共通語と方言がまじった表現を指し、中間的文体で、「地方共通語」(柴田武 1958)という中間的文体と連続的である。沖縄大和口(ウチナーヤマトウグチ)が典型である。英語のnew dialect(Trudgill 2004)は新生の言語体系を指すので、関心と定義が違う。

4.2.5. 共通語化調査と方言地図

国立国語研究所の初期の業績で社会言語学研究に影響のあったのは、共通語化に関する研究だった。研究文献の統計によると(真田信治 1990a)、1960年代には方言の社会言語学研究が一時下火になり、かわりに方言の地理的研究に特徴づけられた。この時期に国立国語研究所では『日本言語地図』LAJという新しい国家企画を抱えた。『日本言語地図』の拡大として『方言文法全国地図』GAJ、『新日本言語地図』NLJがあり、分布の変化が研究されている(大西拓一郎 2016、2017)。

それまでの研究の社会言語学的傾向にもかかわらず、『日本言語地図』で

は、社会的要素が考慮に入っていない。地域の平均的な生え抜きの常民(NORM, Non-mobile Old Rural Male) (Chambers and Trudgill 1980)が、インフォーマントとして選ばれた。当時の日本方言においては、地理的変異が社会的変異よりずっと大きかった。方言の変化を正当に考察し、位置づけるためには、NORMの逆のMYUF(Mobile Young Urban Female)の影響に着目すべきで、これは言語接触の研究にも関わる。

標準語の地理的背景として、かつては京都から、近代には東京から広がったことが明らかになった(井上史雄 2001.2、2011.12)。韓国で、慶州、ソウル、平壤などが担った役割も社会言語学の課題である。言語変化、伝播における交通(鉄道)の作用についても、実証データがある(井上史雄 2017.6)。

4.2.6. 福祉言語学とやさしい日本語

福祉言語学welfare linguisticsは、徳川宗賢が阪神淡路大震災(1995)をきっかけに、唱えたもので(徳川宗賢 1999)、外国人のための「やさしい日本語」の開発として表れた(佐藤和之 2004)。東日本大震災(2011)はじめ、災害時に使われて役立った。外国人へのふだんの通知などにも使われるようになった。さらに、地方に住む外国人、他地方から来る災害ボランティア向けに基礎的な方言情報を伝えようという動きもある。社会言語学は、象牙の塔にこもった学問でなく、社会への還元を目指した研究へと、脱皮しつつある。

4.2.7. 韓国の研究

言語の研究が進むと言語内の違い、変異にまで考察が及ぶ。韓国の方言については小倉進平(1924, 1981)が再刊されたが、社会言語学的考察は含まない。藤井茂利(2002)は、ジャガイモ・サツマイモの方言について、社会的背景を考慮している。韓国国語院では、現地調査以外に、方言回復運動、景観調査などを行っている。

4.3. 集団差

地表を細分する点で方言差の下に位置するのは、集団語group languageである。戦前には菊澤季生により位相phaseと位置づけられた(真田信治 1990a)。集団間の違いとしては、成員の数の多い方から、以下が考えられる。性差(ジェンダー)、年齢差・世代差、社会階層差、集団語、役割語など。

4.3.1. 性差 ジェンダー学

集団として成員数の多いのは性差である。特に女性解放運動の波に乗って、研究が盛んになった。日本語の性差は大きく、質の差(終助詞、非連続)と量の差(表現、連続的)が区別される。日本語敬語と女性語の発達には平行性があり(井出祥子 2006)、男女差の減少は明治期から観察されている。韓国語との違いも指摘されている(尾崎喜光編 2008)。

4.3.2. 集団語の3分類

狭義の集団語は、思春期以降主に単語、まれに文法的現象を習得することにより成立する。質の違い(all or nothing、ある場面でどれを使うか)と、量的違い(程度の差、レパートリーのずれ)に、2分できる。言い換えalternativeの有無による分類もある。言い換え不可能は専門語、言い換え可能は隠語・スラングである。言語ボス(柴田武 1978、Sibata Takesi 1998)の研究もある。

柴田武(1978.12)、Sibata Takesi(1998)は集団語の3分類を試みている。

1 専門語・術語: 言い換え不可。場面・相手により他集団に対してはどんな語も隠語になりうる。

2 隠語: 言い換え可。秘密保持が目的の隠語・女房詞・山ことば・海ことばなど。

3 スラング・流行語: 面白さ・流行意識を伴って使われる。知らない人を遠ざけ、知っている人を近づける。

集団語は、他集団との隔絶、上流意識や下層意識の現われでもある。心理的距離調節にも使われ、ポライトネスとも関係する。専門家アクセント(外来語アクセントの平板化)(井上史雄 2008.5、Inoue Fumio 1997)も専門語的

色彩を示す。韓国語起源の語もあり、チョンガー(独身者)、キョンチャル(警察)、パッチギ(頭付き)などが、一部の集団から広がった。

4.3.3. 言語年齢学

ことばの年齢差・世代差について、年齢言語学age linguisticsが成立する。年齢と言語の関係は単純にとらえられていたが、年齢差が見かけ時間apparent timeで、後年の調査で確認される実時間real timeと、性質が違う(Labov 1994)。個人が成長に従って身に付けることばも、言語変化によるものと年齢階梯制age gradingによるものの区別がなされた。言語変化の手がかりにするなら、過去についての記憶時間memory timeや未来についての想像時間imagination timeを活用できる(井上史雄 2015.9)。

「世代」ということばは、二つの意味で使われる。一つは「ライフステージ life stage」で、個人が一生のうちに経る成長段階である。「10代」の「若者世代」が「青年期」「中年」を経て「実年」「老年」などになる。民俗学でいう「通過儀礼」である。もう一つは同一年齢集団、コーホートcohortで、同じ時期に生まれた人々を指し、ある個人に一生ついて回るレッテルになる。「明治生まれ」「昭和一代」「安保世代」「新人類」などである。

敬語については成人後採用late adoptionが観察されたが(井上史雄 2015.6, 2016.3, 井上史雄他 2017)、他の現象でも若いほど言語変化を早く受け入れるわけではない。音韻については1950年の鶴岡の調査で「社会的活躍層」が一番多く共通語の回答をする傾向が見られた(柴田武 1978, Sibata Takesi 1998)。語彙については「共通語化の遅れ」が指摘された(井上史雄 2000.2)。英語でも観察された(Boberg 2004)。韓国語での例が気になる。

4.3.3.1. 幼児語・児童語・学校用語

以下成長段階ごとに考察する。「ライフステージ語」と呼ぼう。幼児語 baby talk・育児語mothereseが、人生で最初に習得される。幼児への同化として成人にも使われるもので、2, 3歳で周囲の人が使用をやめ、幼児も普通のことばに置き換える。基本的には相手(幼児)への応化accommodationの機能を持つ。ワンワン(犬)、ブーブー(自動車)などオノマトペと関わる例が日

本語には多く、辞書もある。次の段階に児童語child language・遊戯用語・遊びことばがある。方言学の世界では方言量(言い方の種類)の多さで知られ、民俗学者の研究もあった。

その次の段階に学校用語school languageがある。学校は公的に定まった標準語・共通語を(第2言語として)身につける場であり、母語・地域語としての方言と対立する扱いを受けるが、方言差があり、「学校方言」としての研究が出た。

4.3.3.2. 若者語の4分類

この後使う集団語として、若者語がある。さまざまな辞書があり、マスコミで話題になる。大学生のことばは、「キャンパスことば」として各地で記録された。若者語の厳密な定義は難しい。米川明彦(1998)は、「10代後半から20代後半くらいまでの人が使うことば」と定義している。

若者語は4分類できる(井上史雄 1994.4 p.4)。基準は、数十年後の同一ライフステージ(若者)と、数十年後の同一コーホート(かつての若者)の比較である。()内に例を示す。「1 一時的流行語fad word(アジャパー)、2 コーホート語cohort word(ゲン棒)、3 若者世代語youth word(はやめし)、4 言語変化linguistic change(うざい)」に分けられる。3は年齢階梯age gradingに相当する。

4.3.3.3. 専門語・職業語

就職して社会人として使うのは職場の専門用語である。職業集団語は年齢集団語の一部として扱いうる。「オトナ語」と名付けた本もある(糸井重里 2003)。職場の俗語jargonについての辞書(米川明彦 2000)もある。

4.3.3.4. 老人語

ライフステージとして、退職すると、専門語の世界から離れる。若いときに身に付けたことばを保持すると、その後の言語変化のために、古めかしいことばを使うことになる。老人語は「廃語 消えた日本語 死語」などとも呼ばれ、単行本・辞書もある(米川明彦 2003)。中身は多様で、昔の流行語、若者世代語などが混在している。

4.3.4. 社会階層差への関心の薄さ

社会方言social dialectつまり階級方言class dialect、階層方言の研究は日本では栄えなかった。中流意識が広がり、階層差は(少)ないという先入観・迷信があった。また社会階層差はタブーに近く、扱うと差別主義者として非難される。社会学で階層差が主流ではないように、社会言語学でも、階層差は正面から論じられなかった。

実際には、外国語能力、共通語化、敬語使用などにも社会階層差が出る。岡崎敬語調査(井上史雄 2016.3、井上史雄他 2017)では、職種を労務系・接客系・事務系に分類することによって、敬語使用と強く関係することが確認された。文化庁の『国語に関する世論調査』の職業差は、学歴や所得と強い相関を示し、社会階層の指標と見なしうる。敬語や言語知識など多くの項目で、職業との相関が見られるが、報告書でグラフ化されず、文章で言及されない。NHK放送文化研究所の世論調査は、学歴などに基づいて階層差を報告している。

4.4. 敬語・待遇表現の研究発展

以上では、地表上に位置付けできる言語と方言という変異と、さらに個人の所属集団に関わる変異を見た。以下では1個人内の使い分けについて論じる。このうち敬語は日本語で特に発達していると言われる。社会的活動にも必須で、実用本を含め出版物も多く、研究も盛んである。韓国語との類似性、平行性が見られ、対照研究も多い(金順任 2005)。待遇表現が隣接概念で、基本原理の心理的距離は、2言語の使い分けや標準語・方言の使い分けと共通である。

敬語の歴史的発展について、歴史的な前段階とされる自然物敬語や皇室敬語が扱われる。対者敬語address honorificsと素材敬語reference honorificsの区別がなされ、性差・社会階層差が示され、普遍的な一般法則としての敬意低減の法則law of decreasing respectや民主化democratization、平等化equalizationにも言及がある(井上史雄 2017.6)。敬語については、日韓の平行的発展が報告されており、敬語史として普遍的かが興味深い。井出祥子他(1986)の日米対照研究は他の言語にも拡大されている。第3者敬語は、金

順任(2005)はじめ論考が多い。

4.4.1. 敬語の成人後採用

敬語の成人後採用late adoption(井上史雄 2015.6、2016.3)が岡崎の実時間の継続調査によって明らかになった。岡崎調査と同じ調査が韓国でも行われたが(青山秀夫 1969, 1969, 1970)、その追跡調査の話は聞かない。若者の新敬語「っす」、素材敬語不使用が観察されるが、この年齢差(apparent time)は言語変化の反映であり、敬語史の長いタイムスパンで位置づけられる。植民地や帰国子女での敬語の衰退についても、ホスト社会への適応としての普遍的傾向なのかを見る必要がある。韓国ではどうだろう。

言語行動・表現法・運用などについて、世界の敬語との関係にも考察を広げよう。世界地図上に位置づけると、敬語は東アジアに発達し、社会経済的發展と関係すると読み取れる(井上史雄 2008.5)。

4.4.2. 卑罵語

敬語の逆方向とも言える卑罵語については、地域差を見ると、敬語の発達している近畿地方で卑罵語も発達している(井上史雄他 2017)。国語教育・日本語教育で使用、習得が積極的に求められることも少なく、研究も少なかった。

4.4.3. タブー・差別語

タブーに関し、古代の忌みことば、言霊信仰については、明治以来の研究があり、民俗学でも関心を持った。忌みことばは、神仏・動物も対象にし、言語行動に影響する。近現代の公共場で、ことば狩り、(セックス・排泄・身分職業などの)タブーがある。差別語は一時出版や放送の世界で謝罪や補償の問題に発展し、今でも公的場面では使われない。それゆえ差別語の研究結果公表がはばかれた。辞書でも出版社の意向で立項されないことがあり、かつての辞書や一般書籍で四つ文字語four letter wordsが避けられたと同じ事態である。

4.5. 個人内の使い分け

以下では、一個人が使い分けることばについて、敬語関係以外を扱う。場面による変異のparadigmaticな選択である。

4.5.1. 文字言語と文字論

文字論を論じるには、日本語は最適の言語で、表音文字(音素文字=ローマ字、音節文字2種=ひらがな・カタカナ)、表意文字=漢字を使い分けている。文字の社会言語学としては、文字知識と階層、文字の流行(変体少女文字=ぶりっ子文字)、書きことばと話しことばの違いなどのテーマがある。

4.5.2. 役割語

20世紀末期に「役割語」・「ヴァーチャル日本語」という概念が提唱され、研究が盛んになった(金水敏 2003、2007)。マンガなどに使われるもので、「博士語・お嬢様語」などがある。人によることばの違いの大きい日本語特有と思われていたが、韓国語でも、欧米などの他の言語でも、見られる。

4.5.3 個人語

個人語idiolectは変異を扱うための基盤である。言語記述の対象としてインフォーマント一人だけを扱うのは問題がある。1個人は複数の個人語(文体差として)を持ちうる。個人内の変異を正視して、社会・個人の共存体系coexistent systemsも考えるべきである(井上史雄 2000.2)。

4.6. 価値

第2分野の背後の原理の一つは、価値valueで、「言語は価値を持っている」という考え方である。社会的な価値、お金に換算できるような値段・価格が、言語に付いている。構造主義言語学プロパーは価値と切り離れた研究をした。しかし現実の社会は違う。社会言語学は、ことばの価値を扱う。経済言語学がその典型である(井上史雄 2011.12)。

5. 第3分野 談話の規則

5.1. 談話の規則性

社会言語学の第3分野は、談話の規則性を研究する。言語学の分析単位は長くなる傾向がある。20世紀初頭の構造言語学初期には、音韻論のように個々の音声・音韻が記述された。その後単語や文節単位の研究が進み、20世紀後期には文の研究に移った。さらに長い単位が文章におけるパラグラフや、談話の話段、話題などである。つまり21世紀には言語学そのものが、社会言語学の談話研究に接近した。

第3分野は、言語の運用に関わり、コミュニケーション能力 *communicative competence*、社会言語学的能力 *sociolinguistic competence*、社会言語学的規則 *sociolinguistic rule* と呼ばれる現象を扱う。ミクロの社会言語学の中に位置づけられる。Dell Hymes, S. Ervin-Tripp などの *ethnography of communication* や *social norm* (社会学)、*cultural pattern* (文化人類学) など隣接分野でも先駆的研究が進んでいた。第3分野では第1分野と同様に単一の言語体系の運用として扱う。performance(*parole*)の言語学が提唱された流れに乗る研究で、「社会言語学的類型論」に向かう。

5.1.1. 理論的枠組みと実践

第3分野談話の研究は、語用論 *pragmatics* とも関わり、対照研究の方向にも発展している。日本の国語学では、「言語生活学」として位置づけられ、「読む・書く・話す・聞く」「考える」生活の研究と位置づけられた。

5.1.2. 談話の観点導入

第3分野のテーマ談話の進め方には規則性がある。談話行動は熟練労働で、それぞれの文化で一定の型がある。慣習から外れた時の反応として「口のきき方を知らない、非礼、無礼」と評価される。談話研究が盛んになったのには、外国人との対面コミュニケーションが増えたことが背景にある。敬語・待遇表現など、情的コミュニケーションの面で誤解があると、厄介

な問題を引き起こす。

5.1.3. 注釈

「・・・しない」という習慣は気づかれにくい。例えば、命令しない、悪口を言わない、笑わないとか。この不出現の現象の分析に役立つのが、杉戸清樹(1983)が唱えた注釈meta-speechである。談話を実行しつつ、別のレベルでモニターし、ことばに表す。話題、型、知識、様式、談話の要素などについての適切さの判断が、注釈の形で口にして言及される。日本語以外との対比は面白い。

5.1.4. ことばのしつけと難易度

同様に、ことばづかいの約束ごとを言語化する現象として、しつけがある。建前としての言語行動を知るための有効な手がかりになる。いつの段階で子どもにしつけるかで、言語行動の難易度を知ることが可能である。あいさつなど、親や周囲の人が促すことがある。しかしお世辞をいうなどの行動は幼いときには要求されない。つまり難易度が高い。

5.2. 談話の内面的規則性

談話の規則性については、時間軸に沿ったsyntagmaticな配列が、基本にある。談話の内面的規則性と外面的規則性の二つに分けられる。(1)内面的ルールつまりことばの並べ方、使い方(定形と創意)、談話、speech eventの内部構造が、単数の人の談話で、テーマになる。(2)外面的な談話規則は、複数の人の対話で問題になる。Ervin-Tripp(1969)のsequencing rulesが関係概念である。

5.2.1. 二重の3分割

談話の内部構造にも普遍性がある。手紙の書き方が典型である(井上史雄他2007.7)。二重の三重構造を成しており、レポート・論文の構成、用談・会談・世間話にも適用できる。

5.2.2. 談話の論理構造

結論を相手に言わせるのは、ポライトネスと関り、日本人の言語行動の特色とされる。根本原理、相手への心理的距離が時間として反映される。

5.2.3. 談話の機能要素

談話は、談話機能要素に分けられる。談話の文字化データの談話機能要素への割り当ては、岡崎敬語調査で適用し、年齢差、階層差、場面差、心理的負担などが分かった。

5.3. 談話の外面的規則性

言語行動の構造を規制する規則性がある。以下談話の分類を上げる。

5.3.1. 言うか言わないか

まず言うか言わないかの違いがあり、場面・相手＝上下両極端と関係する。ポライトネス理論(Brown & Levinson 1987)の中に位置づけられる。FTA (Face Threatening Act)が非常に大きいときには口に出さない。日本では結婚式などで、または受験生の前で単語がタブーとして避けられ、話題も規制を受ける。フォリナートークでも、相手が不愉快になると思われる話題は避けられる。

5.3.2. あいさつ

人間的接触の開始として、談話の開始の合図として、声をかける。あいさつは談話の最初、切れ目、最後に現れ、言語行動の区切り、接触の開始・継続・打ち切りを表示する。あいさつは実質的情報を伝えず、基本機能は、情動的な共感、交話、交感phatic communion(Malinowski 1923)である。あいさつの定形性と創意性は、海外との差は大きく、多くの対照研究がある。

5.3.3. 話し手の交替と継続

話し手の交替turn taking、話順と継続は(滝浦真人2008)、発言権floor、TRP (Transition Relevance Place交替の潜在的可能性のある場所)などの概念とも関わる。交代規則や交代の合図が研究されており、文の完結、節の切れ目、イントネーションの下降が手がかりになる。質問・割り込みの場面と社会的地位(目上・目下)による許容度などで言語・文化の差がある。

5.3.4. 談話継続の技術

交代と逆に、話し手が継続させる手段として一人しゃべりがある。アーウーfillerの使用や、尻上がりイントネーション(昇降調)、半疑問イントネーション、uptalkが、オーストラリア、アメリカ、日本などで報告されている。

聞き手が継続させる手段として、聞き役に徹することが、形容矛盾だが上手な話し方の基本とされる。注目、あいづちback channelling、nodが手段として使われる。重なりoverlapとして、同時に話しはじめたときにゆずりあう礼儀にも規則性があり、その場で権力powerを持つと思われる人が引き継ぐことが多い。

水谷信子(1993)によると日本人の会話には「共話」が多い(佐々木泰子1995)。逆のさえぎりinterruptionは上下関係が明らかな場合によく出る。けんかのように対立的競争的關係でも見られるが、文化による差が大きい。

5.3.5. 対話の対隣接ペア

対話について、以下のような隣接ペアadjacency pairがある。あいさつとあいさつ、呼び出しと返事、質問と答え、招待と受け答え、苦情と弁解謝罪、ほめ・お世辞と否定受容など。普遍的な現象だが文化によって差があり、対照研究がある。

5.3.6. Griceの協調の公理

Grice(1989)の協調の公理maxims of cooperationは日本語にも適用可能である。次の4個の公理が会話で必要とされるという。1 量quantity 2 質

quality 3 関連性relation 4 様式manner。学校の教室会話や、会議のやり方、裁判などで重要だが、日本では西欧よりもゆるやかとする研究が多い。

5.4. 談話のまとめ

以上談話の規則性についてまとめた。話し手が無意識に熟練労働として習得することが多く、実用書で言及されることもある。日本では最近データ収集が盛んになり、談話の構造が明らかになった。地域差にも注意が向き、言語化の東西差(むしろ中央の関西と辺境としての東北と九州の違い)が指摘された(小林隆・澤村美幸 2015)。対人交渉が盛んになると、談話への関心が広がる。隣接の言語への視野拡大として、日韓の対照研究も、21世紀に多くなった。尾崎喜光編(2008)、洪珉杓(2007)、金庚芬(2012)、鄭圭弼(2013)などで、実証的な成果が報告されている。

6. 第4分野 談話と変異の管理

6.1. 言語の変異の運用

我々は変異(第2分野)を談話(第3分野)の中で使いこなしている。ことばを配列するとき、改まった言い方、くだけた言い方、外国語や方言を混ぜる。その基準を扱うのが、第4分野で、談話の中での変異の運用状況、変異の選択規則とその普遍性がテーマである。

ここでも第2分野と同じく、言語の側から(言語、方言、集団語などの順に)配列できる。言語の使い分けを最初に取り上げる。個人が異なった言語の場面・文脈で行うコード切り替えcode-switchingについては、蓄積が多い。2言語の使い分けは日本の日常の場面でも観察されるようになった。例えば最初と最後のあいさつ部分で、改まった言い回しを使うと、フォーマルな印象を与える。逆に伝達相手の使う言語や方言を選ぶと親近感が生まれる。実質的な知的コミュニケーションが必要な用談部分では、本人にとって使いやすい(誤解なく表現できる)言語が選ばれる。英語に続いて中国語と韓国語が21世紀以降公共場面に登場する機会が増えた。

標準語と方言の使い分け・コード切り替えにも、似た選択原理、社会心理学的メカニズムが作用する。方言がマスメディア、街頭の景観にも使われる。集団語や敬語の使用も同様に説明される。言語、方言、敬語、集団語、専門語などのいずれでも、聞き手と同じことばを使うかで、聞き手との心理的距離を調節できる(奥山洋子 2000)。コード選択の規定要因、社会心理学的距離など、今後の理論的発展が期待される。

実際の談話の場面では言語変異の出現が意図的にまたは無意識に行われている。第2分野変異でも、言語や方言のコード切り替えの研究がある。第4分野の研究は、第2分野の変異と第3分野の談話の研究の結合として、基盤が固められている。

6.2. 言語管理理論による談話の管理

言語管理language management理論は、Neustupny, Jernudらによって唱えられた理論で(Nekvapil 2006, Filozofická fakulta 2013)、第4分野に位置付けられる。その守備範囲は、1.単純管理:個人の相互行為(談話)と2.組織管理:集団の言語計画(マクロの言語計画と言語問題)を含む。言語政策理論では公的機関による意図的な言語政策を扱うことが多いが、言語管理理論では、単純管理と組織管理の双方を扱って普遍的理論を追求する。個人の個々の談話のプロセス全体を、実際の言語行動に出る前の意識や態度まで扱う(Kimura Goro Christoph 2014、木村 護郎クリストフ 2015)。管理過程サイクルとして「留意noting→評価evaluation→調整adjustment design→実施implemetation→事後評価feedback」という循環モデルが提案されている。言語景観の循環過程と共通である(井上史雄 2011.12 p.78)。言語管理理論によって、さらに大きな統一的な理論が生まれることが期待される。

6.3. 使い分けの原理 心理的距離

第2分野と第3分野におけることばの使い分けの原理を、言語普遍的な理論の中に位置づけることが、第4分野の課題である。その基準として、(心理的)距離(psychological) distanceがある。言語行動を社会的距離表示として把握できる。ポライトネス理論politeness theory(Brown & Levinson 1987),

アコモデーション理論accommodation theory(Giles et al. 1991)などの基本原理である。例えば後述の「わきまえ」discernment対「働きかけ」意志volitionの区別(井出祥子 2006、Ide Sachiko 2006、2012)も心理的距離に対応する。

6.4. ディスコース ポライトネス

社会心理学的距離の規定要因についての様々な理論の一つがBrown & Levinson(1987)の「ポライトネス理論」である。ポライトネス理論の見積りの公式は、多くの言語に具体的、実証的に適用されるべきである。

宇佐美まゆみの唱えるディスコース ポライトネスdiscourse politenessは、多くの可能性を備えた研究法で、敬語・ポライトネスに関する言語管理の実証的研究として位置づけられる(宇佐美まゆみ 2015)。一連の談話を収録し、談話の内部でのポライトネス段階の動的な変化に着目する。これは第3分野の談話における第2分野の変異の動的な動きを見るもので、第4分野の実現と言える。日本語では敬語があるために、談話の内部での動的な変化が観察しやすい。談話の開始から終了までの全体を扱うと、ポライトネスの(下降、上昇)変動は大きい。言語普遍的現象かを検証する価値がある。日英対照、日中対照にくらべて、日韓対照は似ているので扱いやすいこともあり、韓国語との対照研究が進んでいる。

宇佐美まゆみ(2011)により、BTSJ(Basic Transcription System for Japanese)のによって一定の質を備えた談話の文字化データが、コーパスとして整備されつつある(日本語自然会話コーパス)。韓国語の談話コーパスも整いつつあり、動的見地からの分析が期待される。日韓の人的交流の増大に対応して、研究が進むだろう。

6.5. アコモデーション理論

アコモデーション(応化)理論accommodation theoryは、対話者間の心理的距離を調節する反応をとらえる理論である。第4分野の基本原理と言える。アコモデーション理論は、相手に合わせ、相手と同じ話し方をする現象を扱う。例えば声の高さや話の速さが相互に似る、相手と同じ単語や文法、表現を用いる。相手と同化し、受容する態度をとることによって好意的反

応がえられる。つまり接触によって同化する現象で、言語変化の基本を説明できる。以上のconvergenceと逆にdivergenceとして、聞き手と違うことを言い表すことでネガティブな態度表明もできる。

6.6. データに出ない現象

言語管理理論では、単純管理と組織管理を含め管理過程全体が分析される。研究方法として、記録された談話の文字化資料を扱うのみでなく、フォローアップインタビューなどによって、一段上からの(または背景の)意図・管理なども探ろうと試みる。この点はかつての構造主義言語学で得られた例文だけを分析していた手法を補う。かつての構造主義言語学とその背景としての行動主義心理学における、得られたデータのみに頼ることの危さを避けよう。談話でも何を言わないか、どんな順番では言わないかなどが重要だが、記録された談話のみから知ることは、困難である。また様々な要因による「回避」の現象も表面上データに出ない。ポライトネス理論で扱われる5. Don't do the FTAという段階を正当に分析するには、この第4分野としての言語管理理論が重要な位置を占める。

社会全体の言語管理としての言語景観でも、隠された景観がある。フランスやハンガリー、イランでの英語(単独)表示の禁止、バルト三国でのロシア語禁止などである。表面だけで判断するのは危険である。

7. 日韓対照研究の将来

7.1. 社会言語学発展の背景

科学の発展は社会の要請に支配される。社会言語学も同様である。社会言語学の研究分野を4つに分けたが、研究の背景には、日本社会の多様性がある。ここでは、背景・基盤について考察する。

7.2. 言語相対性理論から社会言語学へ

単語や文法現象が談話で使われることにより、用法が示される。第1分野言語相対性理論で述べたように、個人の用法の集成が社会全体の用法として普及する。その社会習慣が次の世代に習得され、伝承される。言語管理理論でも同様の管理過程サイクルを考える。この循環過程、らせん構造により、言語は適切な用法を発達させ、社会に適応する。言語と社会は相互関係を結び、通時的变化が積み重なり、言語変化として定着する。これが本稿の結論である。

7.3. 言語間コミュニケーションの増加

第1分野と第2分野で、多言語状況を考慮すべきである。外国人との音声による対面コミュニケーションが増えた。かつて外国語はほぼ文字言語としてのみ扱われた。中国語が漢文として学ばれたのが典型である。現代日本の多言語表示は増えつつある(庄司博史他 2009, Inoue Fumio 2005, 2011)。以前の外来語使用は情的なイメージ(装飾的用法)に支配された。今は知的な実用的コミュニケーションとして、(外国人向けの)多言語が用いられる。

国際化によって、生の外国語の音声にふれる機会が増えた。バイリンガル番組や、字幕付きのインタビュー、同時通訳(時差同通)や交通機関のアナウンスで、外国語の音声が入る。一昔前には中国語や韓国語の生の発音を聞く機会は限られていた。この過程で、異文化誤解、コミュニケーションギャップが問題になる。まったく異なった文化・言語だと、用心深くふるまうが、似ていても、誤解が起こりうる。日韓は、対照研究としては相違の面白みが少ない。しかし平行関係が見られ、その社会的背景として、経済発展、少子化、アメリカ化、グローバル化が時期をずらして進展した。言語と社会の変化が連動するかを検証する実験室としても貴重である。

7.4. 社会心理学的距離

上記4つの分野で共通する背後の原理は、距離distanceと価値valueである。客観的な純粋科学を目指した20世紀の言語学が排除した概念だった。

しかし言語を現実社会の中で考察すると、ことばづかい全般に(言語、方言・共通語、敬語の使い分けに、ポライトネス表現に、談話の進め方に)、距離と価値が浮かび出る。社会的距離表示のための言語行動という考え方が出た。

7.5. 日本の社会言語学の特徴

本稿の目標は二つあった。一つは先行研究の相互関係。もう一つは理論または外国の研究と対比して、日本の社会言語学の特徴を見出すことだった。日本では第2分野の研究が盛んだった。方言の花園の末期の生態をとらえる研究が栄えた。最近が多言語使用についての研究が増えた。共通語化が行き着き、方言との使い分けでなく、英語との使い分けが可能になった。社会生活で必須の敬語についても、研究が進んだ。日本の社会言語学の特徴は、具体的データに基づき、実証的に研究することだったが、第2分野に典型的に表れた。第3分野の談話についての研究は、コーパスが整って、盛んになった。日本語教育と結びついて、考察が進んだ。第4分野の変異の談話における扱いは、今発達しつつある。談話の中の変異の使い分けが豊富に見られる。この状況は世界の近代社会に共通の現象だろう。

7.6. 言語選択と電子データの公開

ことば関係の研究は、対象言語と同じ言語が英語で発表されることが圧倒的に多い。日本人が韓国語の重要な研究成果を知るには、韓国語を学ぶか、英語での発表を待つしかない。研究成果の公開は、現在は紙出版が主流で、電子出版は多くない。しかしCDでまたはインターネットで、電子データが世に出ると、利点が増える。論文などは自動翻訳にかけて、概要を知ることができる。また談話資料などが紙でなく、電子データで公開されるなら、既存のコーパスと同様に、検索に使える。盗用の危険はあるが、これにも対策ソフトがあるので、用心されるだろう。学者の良心に頼ることになるが、学問の発展のために電子化を祈りたい。この根本には、何のために研究するか動機がある。個人の業績稼ぎのためなら、競争のためだから、情報は秘めておくほうがいい。学問の発展、知識の普及のためなら、同

業者の助け合いが有効だから、情報を電子化して共有するほうがいい。個人間でも国家間でも同様である。

現在の談話資料は、統一条件で分析、対比されることが多い。しかし協力者(提報者、インフォーマント)の社会言語学的能力からいうと、(受動的 receptive 理解もふくめると)他の言語、他の方言、集団語、敬語などの多様なレパートリーを持っている。話し手は、場合により自動的に、無意識にことばを変える。まさに第4分野にかかわる言語行動を示す。公表された研究は、その一部分をとらえている。その場には出なくとも、潜在的な可能性として、談話における変異の使い分けを考慮に入れ、広い視野のもとに考慮することが望ましい。

7.7. 将来の発展可能性

本稿を通じて、将来の発展可能性が見えた。第1分野から第2分野については、大量データを集めて分析することが必要である。第3分野についても、大量データが有効で、コーパスを構築公開することが貢献になる。社会言語学の2大潮流、変異と談話を組み合わせた研究が望まれ、第4分野の将来に期待すべきであろう。そもそも第1から第4の順番は、研究史の発展と一致していた。理論・方法論・研究技法と研究対象言語は、別レベルで、切り離してとらえうる。日本語についての研究は、他の言語にも適用可能で、それにより理論的発展が実現される。

本稿が外国の研究者に読まれ、研究テーマのヒント・手がかりが得られ、発展の足がかりになれば幸いである。研究者は常に新しい業績を生み出す義務があり、そのためには、零細企業の経営者と同様に、すきま産業、アイデア産業を目指す必要がある。この努力によって、理論面が発展する。言語地理学では、「最上の調査票は調査が終わったあとに出来上がる」という。すべての研究に適用できるもので、常に向上を目指すべきである。隣の似た言語の成果は、役立てるのに最適である。

雪ことばの方言分布が降雪量と関係があることを見た(井上 2010.10)。韓国などにも広げなかった。地名のカミシモは、日本では川の上流下流によるものと、京都への近さによるものがある。上野(かみつけの→こうづ

け)・下野(しもつけの→しもつけ)が典型だが、小地名でも見られる。なぜ上対馬が北で下対馬が南なのか不審だった。戦前の朝鮮半島の地図で小地名のデータを作ったが、未発表である。

Neustupnyは言語政策を第4分野に入れたが、第2分野に置くほうが、単純に記述できる。

かつての琉球王国、現在の沖縄県や奄美諸島のことばが、独立の言語なのか、日本語の方言なのかは、社会言語学の基本問題である。

外国語(主に英語)が日本語文脈の中に登場しはじめたのと同様に、現代日本の多言語化を示す。

歴史的な文脈でかつての差別を含まない用法は、注付きで使われることがある。

外国語との対照研究で性格が明らかになる。系統の異なる言語での共通の言語連合Sprachbundと区別して唱えられたSprechbund (Neustupny 1978)、つまり話し方についての(言語を越えた)共通性がありうる。

国家や社会が様々な言語変種の使い方、扱い方を変えることがある。言語計画language planning 言語政策language policyに関する分野もここに入るが、社会言語学の概説の際には第2分野にまとめるほうが単純に記述できる。

個人の談話の管理では短時間で行われるが、組織管理としての言語政策では実現までに時差がある。この過程全体を扱うには、第2分野に入れるほうがいい。国や組織が「言語・方言・敬語・専門語」などをどう扱うかが、第2, 第4分野の両方にまたがるのは、記述に不便をきたす。

参考文献

* English papers by F. Inoue before 2002 are accessible through the internet.

http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/person/inoue_fumio/doc/

<http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/18ex/achievements.xls>

青山秀夫、「現代朝鮮語の敬語と敬語意識—京畿道驪州邑における実態調査報告-1-3」、『朝鮮学報』(51, 53, 57), 朝鮮学会, 1969, 1969, 1970.

- 朝日祥之, 『サハリンに残された日本語権太方言』, 明治書院, 2012.
- Boberg, Charles, “Real and apparent time in language change: late adoption of changes in Montreal English”, *American Speech* 79(3), Duke University Press, 2004.
- ブルトン, ロラン, 『言語の地理学』, クセジユ, 1988.
- Brown, P. and S. C., *Levinson, Politeness — Some Universals in Language Use*, Cambridge University Press, 1987.
- Calvet, Louis-Jean, *Pour une écologie des langues du monde*, Plon. (translation 2006 Towards an Ecology of World Languages. Wiley), 1999.
- Chambers, J. K., and P. Trudgill, *Dialectology*, Cambridge University Press, 1980.
- Chien 簡月真, 『台湾に渡った日本語の現在: リンガフランカとしての姿』, 明治書院, 2011.
- Coseliu, Eugonio, *Die Sprachgeographie Tuebingen*, (コセリウ、E. (1981), 『言語地理学入門』三修社), 1975.
- Ervin-Tripp, Susan. M., Sociolinguistics. *Advances in experimental social psychology*, Pages 91–165 Elsevier, 1969.
- Filozofická fakulta Univerzity Karlovy v Praze, *language management*, 2013 <http://languagemanagement.ff.cuni.cz/ja>
- 藤井茂利, 『東アジア比較方言論』, 近代文芸社, 2002.
- Giles, Howard, Coupland, Jaworski, & Coupland, Nicholas. (Eds.), *The contexts of accommodation: Developments in applied sociolinguistics*. New York: Cambridge University Press, 1991.
- Grice, Herbert Paul, *Studies in the Way of Words*, HUP, 1989.
- 洪珉杓, 『日韓の言語文化の理解』, 風間書房, 2007.
- Hymes, D., *On Communicative Competence*. In J. B. Pride, & A. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics: Selected Readings*. Harmondsworth: Penguin, 1972.
- 李舜炯編, ダニエルロング・中井精一監修, 『都市空間を編む言語景観』, 中文出版社, 2019.
- 井出祥子, 『わかまへの語用論』, 大修館, 2006.
- Ide, Sachiko, “Roots of the Wakimae Aspect of Linguistic Politeness: Modal Expressions and Japanese Sense of Self”. Michael Meeuwis Jan-Ola Östman (eds) *Pragmaticizing Understanding: Studies for Jef Verschueren*, Amsterdam: John Benjamins, 2012.
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子, 『日本人とアメリカ人の敬語行動』, 南雲堂, 1986.
- 任榮哲, 『(在日・在米韓国人および韓国人の)言語生活の実態』, くろしお出版, 1993.
- 任榮哲編・真田信治監修, 『韓国人による日本社会言語学研究』, おうふう, 2006.
- 任榮哲・井出里咲子, 『箸とチョッカラク』, 大修館書店, 2004.
- 糸井重里, 『オトナ語の謎』, 糸井重里事務所, 2003.
- 井上史雄, 『方言学の新天地』, 明治書院, 1994.4.
- Inoue, Fumio, *Recent change of word-accent in Japanese — Correlations with sociolinguistic groups*, Heinrich Ramisch & Kenneth Wynne (eds.) *Language in Time and Space. Studies in Honour of Wolfgang Viereck on the Occasion of his 60th Birthday*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag (Zeitschrift fuer Dialektologie und Linguistik BeihefteNr. 97), 1997.

- Inoue, Fumio, *Subjective dialect division in Great Britain*, Dennis Preston (ed.) *Handbook of Perceptual Dialectology*, 1, John Benjamins, 1999.
- 井上史雄『東北方言の変遷』, 秋山書店, 2000.2.
- 井上史雄『日本語の値段』, 大修館, 2000.10.
- 井上史雄『計量的方言区画』, 明治書院, 2001.2.
- Inoue, Fumio, “Econolinguistic Aspects of Multilingual Signs in Japan”, *Changing Language Regimes in Globalizing Environments: Japan and Europe*, IJSL 175/176, 2005.
- 井上史雄『変わる方言 動く標準語』, 筑摩新書, 2007.2.
- 井上史雄『社会方言学論考—新方言の基盤—』, 明治書院, 2008.5.
- Inoue, Fumio, “Economic principles for multilingual signs in Japan”. *明海大学応用言語学研究*13, 2011.3.
- 井上史雄『経済言語学論考』, 明治書院(Korean訳書あり), 2011.12.
- 井上史雄「韓日間のコミュニケーションギャップを考える」*日語日文学研究*82-1, 2, 2012.8.
- 井上史雄「日本語の世界進出—グーグルでみる外行語—」, 陣内他編『外来語研究の新展開』おうふう, 2012.10.
- 井上史雄「外行語と外来語(日本語の攻防)」, 『日本語学』32(15), 12月号, 明治書院, 2013.12.
- Inoue, Fumio, *Dialect Lexicography and the Standard Language—Words for Snow and Suburban Tokyo Dialect—*, *Dialectologia special issue IV*, *Dialectologia*, 2013.12., <http://www.publicacions.ub.edu/revistes/dialectologiaSP2013/>
- 井上史雄「言語景観の表層と深層 —政治と経済—」, 『日本学』40, 東国大学校日本学研究所, 2015.5.
- 井上史雄「敬語の成人後採用と追跡調査データ」, 『日本語学研究』44, 韓国日本語学会, 2015.6.
- 井上史雄「「お父さん」の記憶時間—グロットグラムによる地域差と年齢差—」, *社会言語科学*, 18-1, 社会言語学会, 2015.9.
- 井上史雄『敬語表現の成人後採用—岡崎における半世紀の変化—』, 国立国語研究所, 2016.3.
- 井上史雄「ことばの社会的伝播と方言区画形成(in Korean)」, 『方言学』25号, 韓国方言学会, 2017.6.
- 井上史雄他『デジタル社会の日本語作法』, 岩波書店, 2007.7.
- 井上史雄他『敬語は変わる—大規模調査からわかる百年の動き—』, 大修館, 2017.9.
- 鄭圭弼『韓日ビジネス場面における日本語のインターアクション行動』, *Gworld*, 2013.
- 金庚芬『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』, ひつじ書房, 2012.
- 金順任「日韓の社会人における第三者敬語の対照研究：アンケート調査の結果から」, 『日本語科学』18, 明治書院, 2005.
- Kimura, Goro Christoph(2014), “Language management as a cyclical process: A case study on prohibiting Sorbian in the workplace”, *Slovo a Slovesnost*, 75(4), Czech Language Institute, 2014., http://languagemanagement.ff.cuni.cz/en/system/files/documents/SaS-75-2014-4_Kimura_255-270.pdf
- 木村護郎クリストフ「言語管理理論における研究者の位置づけ：ヨーロッパ統合に関する調査事例から」, 『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書(292)』, 千葉大学, 2015.

- 金水敏, 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店, 2003.
- 金水敏, 『役割語研究の地平』, くろしお出版, 2007.
- Kinsui, Satoshi and Yamakido H., *Role Language and Character Language Acta Linguistica Asiatica*, revije.ff.uni-lj.si, 2015.
- 小林隆, 澤村美幸, 『ものの言いかた西東』, 岩波新書, 2015.
- 国立国語研究所, 『日本語と朝鮮語』(上巻回顧と展望編)(下巻研究論文編), くろしお出版, 1997.
- 久保田優子, 『植民地朝鮮の日本語教育』, 九州大学出版会, 2005.
- Labov, William., *Principles of Linguistic Change*. Vol.1 Internal Factors, Oxford: Blackwell, 1994.
- 林八龍, 『日・韓国語の慣用的表現の対照研究』, 明治書院, 2002.
- Malinowski, Bronislaw, “The Problem of Meaning in Primitive Languages” in C.K. Ogden and I.A. Richards *The Meaning of Meaning* London: Routledge, 1923.
- Minami, Fujio, *Keigo [Honofrifics]*, Iwanami Shoten, 1987.
- 水谷信子, 「「共話」から「対話」へ」, 『日本語学』12-4, 明治書院, 1993.
- 宮下尚子, 『言語接触と中国朝鮮語の成立』, 九州大学出版会, 2007.
- 中井精一・ダニエルロング編・内山純蔵監修, 『世界の言語景観 日本の言語景観』, 桂書房, 2011
- Nekvapil, Jiri, From language planning to language management. *Sociolinguistica. International Yearbook of European Sociolinguistics* 20, 92104, 2006.
- Neustupny, J. V., *Post-structural Approaches to Language*, University of Tokyo Press, 1978.
- 生越直樹, 「日本と韓国の言語行動対照分析」, 『講座・日本語教育学』スリーエーネットワーク, 2006.
- 奥山洋子, 「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話一質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に」, 『日本學報』45, 韓國日本學會, 2000.
- 小倉進平, 『南部朝鮮の方言』, 第一書房, 1924, 1981.
- 大西拓一郎編, 『新日本言語地図』, 朝倉書店, 2016.
- 大西拓一郎編, 『空間と時間の中の方言』, 朝倉書店, 2017.
- 纒坂英子編, 『韓国における日本語教育』, 三元社, 2007.
- 尾崎喜光編, 『対人行動の日韓対照研究』, ひつじ書房, 2008.
- 真田信治, 『地域言語の社会言語学的研究』, 和泉書院, 1990a.
- 真田信治, 「ネオ方言の実体(地域方言と社会方言)」, 『日本語学』18(13), 明治書院, 1999.
- 真田信治・柴田武編, 『日本における社会言語学の動向』, 非売品, 1982.
- Sanada, Shinji and Yuchchen Chien, *Japanese-lexicon creole in Taiwan*. NINJAL Project Review 3(1), 발행처, 2012.
- 真田信治・生越直樹・任榮哲編, 『在日コリアンの言語相』, 和泉書院, 2005.
- 佐々木泰子, 「「共話」の理論に関する一考察」, 『言語文化と日本語教育』(9), お茶の水女子大学, 1995., <https://teapot.lib.ocha.ac.jp/index.php?action=pages>
- 佐藤和之(2004), 「災害時の言語表現を考える—やさしい日本語・言語研究者たちの災害研究」, 『日本語学』23(10), 明治書院, 2004.
- 柴田武, 『日本の方言』, 岩波新書, 1958.
- 柴田武, 『社会言語学の課題』, 三省堂, 1978.

- Sibata, Takesi, Takesi Sibata: Sociolinguistics in Japanese Contexts. Edited by Tetsuya Kunihiro, Fumio Inoue & Daniel Long(Moutonde Gruyter), 1998.
- 庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編著, 『日本の言語景観』, 三元社, 2009.
- 杉戸清樹, 「待遇表現としての言語行動——「注釈」という視点」日本語学, Vol. 2, 7月号, 明治書院, 1983.
- 高木丈也, 『中国朝鮮族の言語使用と意識』, くろしお出版, 2019.
- 滝浦真人, 『ポライトネス入門』, 研究社, 2008.
- 徳川宗賢, 「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」, 『社会言語科学』, 社会言語科学会, 1999., jstage.jst.go.jp
- Trudgill, Peter, “Colonial Lag” and New Zealand evidence for the phonology of nineteenth-century English American Speech, - JSTORA, 1999.
- Trudgill, Peter, New Dialect Formation: The Inevitability of Colonial Englishes. Edinburgh: University Press, 2004.
- 宇佐美まゆみ, 「改訂版: 基本的な文字化の原則(BTSJ: Basic Transcription System for Japanese) 2011年版」, <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>
- 宇佐美まゆみ, 「『総合的会話分析』の趣旨と方法-量的分析と質的分析の必然的融合-」, 『日本語教育』162号, 日本語教育学会, 2015.
- Weijnen, Antonius, Outlines for an Interlingual Dialectology (Assen), 1978.
- 梁敏鎬, 「外来語をめぐる意識に関する日韓対照研究」, 『国語学研究』46, 東京大学文学部「国語学研究」刊行会, 2007.
- 梁敏鎬, 「日本語と韓国語の外来語の受容意識—イメージ調査の分析—」, 『外来語研究の新展開』, おうふう, 2012.
- 米川明彦, 『若者語を科学する』, 明治書院, 1998.
- 米川明彦, 『集団語辞典』, 東京堂出版, 2000.
- 米川明彦, 『日本俗語大辞典』, 東京堂出版, 2003.

要旨

日韓社会言語学研究の動向と展望

井上史雄(東京外大)

社会言語学の研究は世界で隆盛を続けている。日本と韓国の研究には相違点も共通点もあり、相互に影響を及ぼしている。社会言語学の流れには変異と談話の2傾向がある。本稿では、社会言語学的研究テーマを、社会言語学の4分野として位置づける。第1分野は言語相対性理論で、第2分野は言語変種(言語、方言、集団語、敬語など)の記述である。第3分野は言語運用の記述で、ことばの並べ方を扱う。第4分野は、言語変種の運用を扱う。第1分野から第4分野への順番は、ここ100年の学説史的発展とも一致する。この4分野によって、日本の研究を展望し、韓国の研究と関連付けた。日韓は、それぞれの国の社会状況に応じて、研究を展開したことが読み取れた。これにより、将来の発展可能性が見えた。大量データを集めてコーパスを構築公開することが必要である。また社会言語学の2大潮流、変異と談話を組み合わせた研究が望まれ、第4分野の将来が期待される。理論・方法論・研究技法と研究対象言語は、別レベルで、切り離してとらえうる。日本語についての研究は、他の言語にも適用可能で、それにより理論的発展が実現される。

キーワード: 日韓対照研究、変異理論、談話研究、社会言語学の4分野

ABSTRACT

Trends and Prospects of Japan-Korea Sociolinguistics Research

INOUE, Fumio (Tokyo Univ. of Foreign Studies)

Research on sociolinguistics continues to flourish in the world. There are differences and similarities between Japanese and Korean studies, which influence each other. There are two tendencies in the trends of sociolinguistics: variation and discourse. In this paper, sociolinguistic research topics are positioned in four fields of sociolinguistics. The first field is linguistic relativity, and the second field is description of language variation (languages, dialects, group language, honorifics, etc.). The third field is the description of language performance, which deals with the arrangement of words. The fourth field deals with the performance of language variation. The order from the first field to the fourth field coincides with the historical development of theories over the last 100 years. Based on these four fields, I survey Japanese research and relate it with Korean research. It can be read that Japan and Korea have developed their researches in accordance with the social conditions in their respective countries. This made it possible to see the potential for future development. It is necessary to collect a large amount of data and construct a corpus and publish it. In addition, research combining two major trends in sociolinguistics, variation and discourse is desired, and the future of the fourth field is promising. Theories/methodologies/research techniques and research target languages can be viewed separately at different levels. Research on Japanese can be applied to other languages as well, which will bring about theoretical development.

Key words : Japan-Korea contrast research, variation theory, discourse analysis, four fields of sociolinguistics

접수일(2020.7.26.)	심사일(2020.8.10)	게재확정일(2020.8.20)
-----------------	----------------	------------------